

＜幼稚園教育＞

人とかかわる力を育てるための援助の工夫

－遊びの中での感情体験を通して－

大里村立大里南幼稚園教諭 屋 我 松 枝

内容要約

人とかかわる力を育てるために、チーム保育を行い、感情体験をする場面から多面的・多角的に内面理解をし、保育記録を積み重ねていくことで発達の方角を見通し、発達を促す援助をすることができた。その結果、幼児が友だちと考えたり試したりして工夫して遊ぶ楽しさを味わったり、相手の気持ちに気づき、気持ちの立て直しをして仲良く遊ぶ等、人とかかわる力の育ちが見られた。

【キーワード】 人とかかわる力 感情体験 チーム保育 内面理解 発達を促す援助

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究の全体構想図	2
III	研究内容	3
1	人とかかわる力を育てる	3
2	幼児の発達する過程と人とかかわる力の育ち	4
3	幼児理解	5
4	教師の援助	5
IV	保育実践	6
1	活動名	6
2	活動設定の理由	6
3	保育の目標	6
4	保育の視点	6
5	保育実践の展開	7
6	保育の視点の検証	8
V	研究の考察	9
1	保育記録を基にした多面的・多角的な内面理解	9
2	発達の方角を見通し、発達を促す援助	10
VI	研究の成果と今後の課題	10
1	研究の成果	10
2	今後の課題	10

＜幼稚園教育＞

人とのかかわる力を育てるための援助の工夫

ー 遊びの中での感情体験を通して ー

大里村立大里南幼稚園教諭 屋 我 松 枝

I テーマ設定の理由

人とのかかわる力を育てることは、これからの激変していく社会を仲間と共に支え合って生きていくための大きな力につながるものと考えます。幼稚園教育要領の領域「人間関係」でも『他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とのかかわる力を養う』ということが重視されている。幼児期は遊びの中で嬉しい、楽しい、悔しい、悲しい等の多様な感情体験をし、友だちの気持ちに気づきながら自己発揮や自己抑制をするなど友だちとのかかわり方を学んでいく時期である。しかし、近年、核家族化や少子化、地域での遊び場の減少等から人とのかかわる力が育ちにくくなっている。そういう状況の中で同年齢の子と触れ合いがもてる幼稚園において、人とのかかわる力を育てていくことは重要なこととなってくる。幼稚園では、単に「友だちと仲良く遊ぶ」「ケンカをしない」等、うまく付き合うことだけを目指すだけでなく、遊びの中で友だちと様々な感情の交わりを体験させることが大切になってくる。

これまでの実践を振り返ってみると、園での遊びの中で、できた時の嬉しさや、遊具の奪い合いで悔しい思いをする等、幼児が様々な感情体験を味わう場面において、嬉しさを共感したり、悔しい思いを聞いてあげたりして援助をしてきた。しかし、同じ子が同じようなトラブルを繰り返すことが度々あった。このことは、教師の気持ちの中で、トラブルの解決を急ぐあまり、幼児が納得しないまま善し悪しを教え込んで謝らせたり、相手の気持ちに触れ、気づかせたりして、自ら納得していけるような援助ができていなかったことが原因として考えられる。又、より深い内面理解を行うために、保育記録をとることの必要性を感じながらも、積み重ねて記録をとっていくことの努力が足りなかった。そのために内面理解を深めることができず、発達に必要な援助ができていなかったと考えられる。

幼児は同時時間帯に多種多様な遊びを繰り返していく。その中で多面的・多角的に内面理解を行い、援助をしていくためには全職員でチーム保育を行うことが必要である。又、一人一人の内面理解をするためには積み重ねた保育記録が重要な役割を果たしてくる。保育記録から、幼児が「何をどのように感じているのか」と内面を理解し、「何が育とうとしているのか」発達の方向を見通し、「今、必要な経験は何か」を考えて援助のあり方を探っていく。このような積み重ねがなされた時に、幼児は遊びの中で体験した感情を発達に生かしていくことができるであろう。

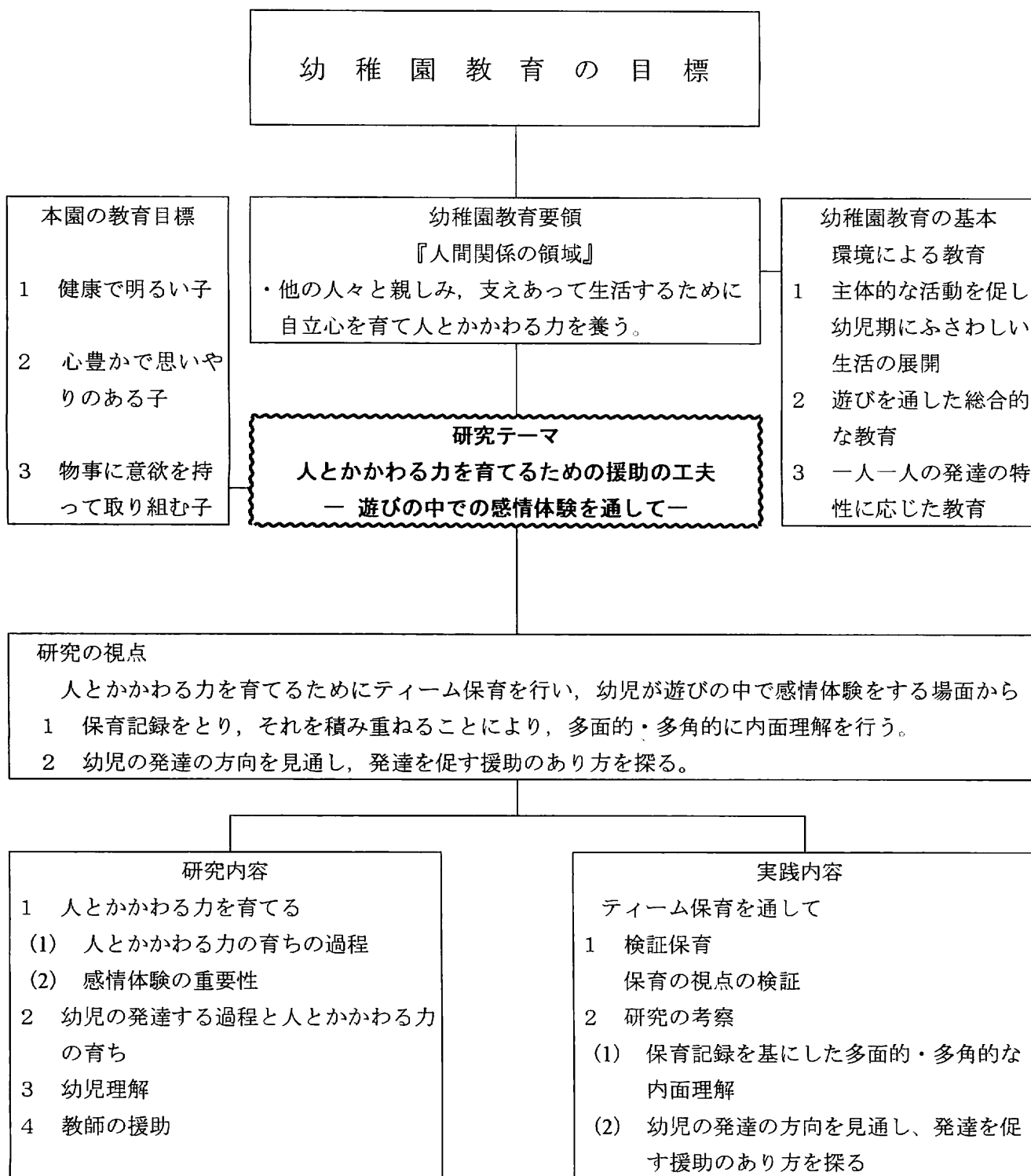
そこで、幼児が遊びの中で感情体験をする場面から内面を理解し、援助のあり方を探りながら人とのかかわる力を育てたいと考え、本テーマを設定した。

＜ 研究の視点＞

人とのかかわる力を育てるためにチーム保育を行い、幼児が遊びの中で感情体験をする場面から

- 1 保育記録をとり、それを積み重ねることにより、多面的・多角的に内面理解を行う。
- 2 幼児の発達の方向を見通し、発達を促す援助のあり方を探る。

Ⅱ 研究の全体構想図



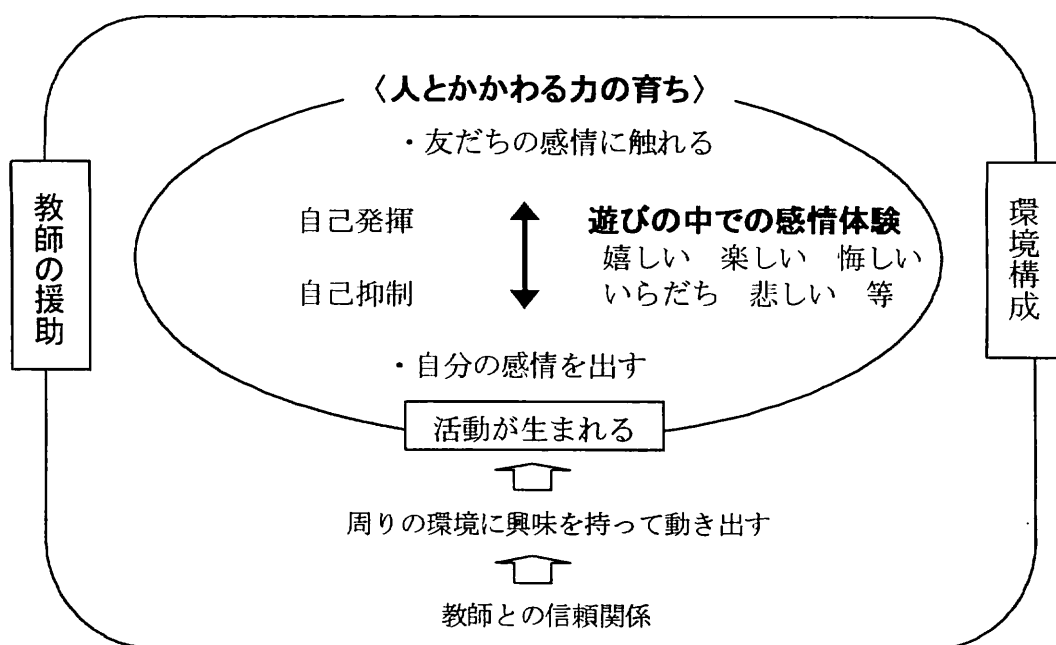
Ⅲ 研究の内容

1 人とかわる力を育てる

(1) 人とかわる力の育ちの過程

人とかわる力とは、自分の思いや考えを相手に言葉や行動、態度、表情などによって伝え理解を得ようとする力であり、人と親しんだり、受け入れたり、支えあったりする気持ちを含めた行動力であると捉える。

・ 人とかわる力の基礎は自分が親や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感を持つことが根底になり、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって人とかわる力が培われる。そこで、幼稚園においては何よりも教師との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤としながら様々なことを自分の力でやり、充実感を味わうようにする事が大切である。そのためには教師の計画通りに活動をさせる画一的な保育ではなく、幼児一人一人の興味・関心に基づいた主体的な活動が展開されることが大事である。そこで、人とかわる力を育てるためにはいろいろな角度からの育ちが想定されるが、とりわけ幼児が遊びの中において味わう感情体験は人とかわる力を育てる上で重要となってくると考え次のように「人とかわる力の育ち」「遊びの中での感情体験」「教師の援助」との関連性を図でイメージした。



人とかわる力の育ちのイメージ図

(2) 感情体験の重要性

人とかわる力の育ちにおいて感情体験の重要性を考えた。

【感情の表出体験】

環境とのかかわりの中で、幼児は自己像を確かなものにしていける。自分の感情を表出することによって相手の反応を通して自分の立場を認識（自己発見）していくのである。その意味で怒り、驚き、喜び等の体験をするということは極めて重要である。

【達成した時に味わう感情】

幼児にとって「できた」「わかった」という達成感は心地よいものである。生活や遊びへの励みになり、次への意欲、主体的な姿勢、態度の基盤になる。達成感は一人的感情にとどまらず「喜び合う」「ほめる」「励ます」ことに見られるように「自分達」の感情体験として受け止めるようになる。嬉しい時にその気持ちに共感してくれる相手の存在が、大きな心の支えとなり、その相手との温かな感情のやり取りを基に、自分も友だちの嬉しさに心が向くようになっていく。

【挫折感の中で味わう感情】

自分の思いが相手に伝わらないこと等から感ずる「もどかしさ」「いらだち」「悔しさ」など幼児はさまざまな葛藤を経験する。その感情が挫折感につながる。時には泣く、かんしゃくをおこす、怒るという情動を示し、それに伴う周囲の人との関係の変化に気づき、生活や遊びの中で、自分がいかにふるまうべきかを学んでいく。自己主張のぶつかり合いは幼児の自己発揮と自己抑制の調和のとれた発達の上で重要な意味を持っている。

【相手の感情に触れて罪悪感を抱く】

幼児期は、生活や遊びのふくらみに伴って、結果としての「いたずら」が目立つ。「いたずら」は幼児期の健康的な育ちの表れである。生活や遊びの中で繰り返される「いたずら」を介して、相手の怒りに触れながら少しずつ「罪悪感」が芽生えてくる。「いたずら」は幼児の生活や遊びにおける行動規範を学習する機会である。幼児は罪悪感を内面化した行動規範を身につけ、友だちと生活や遊びを展開する。

【相手の感情に共感する】

自己中心的な感情理解ではなく、相手の立場に立って考えられるようになるためには、友だちとかかわり、感情的な行き違いや自他の欲求の対立というような経験も必要である。幼児は自分とよく似ている人、好きな人に対して、共感し、思いやりのある行動をする傾向があるので、共によく遊ぶ仲のよい友だちを持つことが思いやりを持つ上で重要である。

2 幼児の発達する過程と人とかかわる力の育ち

幼児の発達は幼稚園教育要領に示されている5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」が相互に絡み合いながら促される。人とかかわる力はこの5領域と密接に関連し、園生活の基底をなしていると考えられる。そこで、幼児がどのように育ちつつあるのかということを知る手がかりとして入園から修了までの幼児の発達の過程と、人とかかわる力の育ちを見る目安（視点）として幼児の姿を示すことで幼児の人とかかわる力の育ちを見ていく。

期	幼児の発達する過程	人とかかわる力の育ちの目安となる姿
一期	一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して、幼稚園生活に親しみ、安定していく時期	・喜んで登園し、先生や友だちに親しむ。 ・自分の居場所を見つけて安定する ・自分のことは自分でできる。 ・自分の好きな遊びを見つけて遊ぶ。
二期	周囲の人や物への興味や関心が広がり、生活の仕方や決まりがわかり、自分で遊びを広げていく時期	・友だちがやっていることに興味や関心を持ってかかわる。 ・友だちとの遊びに喜んで参加する ・自分の思ったこと考えたことを友だちや先生に伝える。 ・友だちと楽しく生活する中で決まりの大切さに気づき守る。
三期	友だちと思いを伝え合い、共に生活をする楽しさを知っていく時期	・友だちと喜びや悲しみを共感する。 ・相手の思ったことや考えを聞こうとする。 ・友だちの良さに気づき一緒に遊ぶ。 ・相手の気持ちに気づき、気持ちの調整をしようとする。 ・言っていることや言っていないことがあることに気づく。
四期	友だち関係を深めながら、自己の力を充分に発揮して生活に取り組む時期	・相手の気持ちに気づき慰めたり励ましてあげる。 ・友だちとルールを作ったり競ったりしながら挑戦して遊ぶ。
五期	友だち同士で目的をもって幼稚園生活を展開し、深めていく時期	・共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。 ・集団の目標を自分の目標として取り組み一緒にやり遂げていく。

3 幼児理解

教師が幼児を理解するということは保育の原点であり、出発点であると捉える。幼児理解は教師が幼児の言動や表情からその幼児の良さや可能性、発達する姿、心の動きなどを受け止め理解することである。しかし、完全に理解することはなかなか困難なことであり、その子の内面に触れようとする教師の努力、姿勢が大切であると考え、保育実践の中で次の方法で幼児理解に努める。

- ① 触れ合いを通して（目線に立って、温かい気持ちで）
 - ・表情や言動から感情に触れる。
 - ・行動からありのままの姿を受け止める。
 - ・言葉のやり取りで考えを受け止めたり興味・関心を探る。
- ② 保育記録の中からティーム保育を通して（多くの目で）
 - ・幼児の興味・関心、気持ちを読みとる。
 - ・幼児が発達しようとしている姿を読み取る。
 - ・教師自身の援助のあり方を探る。
- ③ 家庭との連携から（連絡ノート、園だより、クラスだより、登降園時に直接父母と話し合う）
 - ・登園前の家庭での様子を知る。
 - ・園での様子を知らせる。

4 教師の援助

人とかかわる力を育てるためには、教師が一人一人の思いを受け止め、尊重しながら、幼児の立場に立って考えようとすることや、心のつながりを大切に、幼児が自分の力で歩き出せるように援助をすることが必要である。教師がどのような姿勢でどのように幼児とかかわっていけばいいのか教師の援助のあり方を考える。

① 温かい関心を寄せる

幼児が挫折、葛藤、情緒が不安定になる等の場面に出会った時、教師は「何とかしなければ」とあせりがちである。教師の気持ちにあせりがでるとどうしても幼児の行動に問題があるように見えてしまい、かかわり方も温かさに欠けてしまう。幼児の発達に対する深い理解と自分から伸びていく力を信じて、どのような姿であってもあせらずに温かく見守る教師の姿勢が大切である。

② 心の動きに応答する

幼児が様々な感情で心を動かし自分から環境にかかわろうとする気持ちを育てることが大切である。教師は幼児と生活を共にしながら幼児が「何を感じているのか」心の動きを感じ取ろうと努力をし、教師のかかわり方に対する幼児の反応を確かめながら、どのくらい幼児の心に近づけたか、あるいは、どのくらい気持ちのズレがあるのかを気づいて、自分らしい応じ方を生み出していく。

③ 共に考える

幼児が今やろうとしていることや心の状態に肯定的な関心を持ち、幼児の心に寄り添っていくことである。自分の考えや思いが受け止められた喜びを味わえるようにしながら、幼児の思いや考え、つまづきなどを理解しようと教師が幼児と一緒に考える時間を過ごす体験は、幼児が自分で考え行動しようとする気持ちをもつためのベースとなるものである。

④ 集団のつながりを育てる

お互いの信頼感で結ばれた温かい集団は、集団の人数が何人であろうとも、その一人一人をかけがえのない存在として接する教師の姿勢から生まれてくるものである。どの幼児も集団の一員として大切に接する教師と生活を共にする中で幼児はお互いを大切に接する姿勢を身につけていく。そのことが心のつながりをもった温かい集団を作り出すことにつながる。

⑤ 保護者との信頼関係を築く

幼児の発達にとって幼稚園の教育と家庭での教育とが共に大切な意味をもっている。何でも話せるような雰囲気を作り、相手の立場に立って話を聞き、受け入れること。子どものよい面や伸びる可能性を中心に話すようにし、心のつながりを大切にして考え、話し合う姿勢をもつことが大切である。

Ⅳ 保育実践

1 活動名

友だちと一緒に楽しく遊ぼう

2 活動設定の理由

(1) 教材観

幼児が興味や関心をもち、意欲的に周囲の環境にかかわっていくこと、すなわち主体的に活動を展開することが幼児教育の前提である。主体的な活動は、友だちとのかかわりを通して、より充実し、豊かなものとなる。遊びの中で友だちと思考を巡らし、心を動かしながら充実感を得ることが幼児にとって発達に必要な経験を積み重ねていくことにつながるであろう。そこで、幼児の興味・関心を引き出し、環境構成をしていくことで友だちと考えたり試したりして工夫をし、様々な感情体験を味わいながら自分の思いを伝えたり、相手の気持ちに気づいたりして、友だちと一緒に楽しく遊びを展開していくだろうと考え、ビー玉遊び、巧技台遊び、楽器遊び、ままごと、バランスカーの活動を取り上げた。

(2) 幼児観

本園の全園児を対象にアンケートをとった。主な結果は次の通りである。入園前に保育園を経験している幼児が 90%、降園後、学童・預かり保育で過ごす幼児は 65%である。このことから保育園や学童等で異年齢や同年齢の集団の中でかかわりをもっている幼児が多いことが分かった。又、自己抑制力の面では自分の思いが通らない時、泣いて思いを伝える、叩いたり物を投げたりして思いを伝えようとする幼児が 63 %、粘り強く自分の思いを伝えようとする 35 %、他の人に助けを求める 2 %となっている。園生活の中でも自分の思い通りにならないと泣いたり、友だちを叩いたりしてけんかになることがよくある。教師は幼児に自分の思いを相手に伝える経験をさせ、それぞれの幼児の主張や気持ちを十分に受け止め、互いの思いが伝わるようにしたり、納得して気持ちの立て直しができるようにしたりするために援助をしていく必要があると思われる。

(3) 指導観

幼児が興味や関心のある活動を精選し、環境構成をすることで、友だちと一緒に主体的に環境にかかわって遊びを展開するであろう。友だちとの遊びの中で、幼児は、できた時の喜びを共感したり、物の奪い合いで悔しい思いをしたり、あるいは、考えの相違による対立や葛藤など様々な感情体験を味わう。それらの感情体験を通して、相手の気持ちに気づく、気持ちの立て直しをする等、発達に必要な体験を積み重ねていけるようにするために、幼児がどのような気持ちでいるのか、一人一人の思いを受け止めて、尊重しながら、幼児の立場に立って考え、援助をしていきたい。又、自己発揮と自己抑制力の調和のとれた発達の上で、自己主張のぶつかり合う場面は重要な意味を持っていることを考慮し、自分の思いや考えを主張したり、自分の感情を抑え、相手を思いやる気持ちを持つようになる等、育っていこうとする姿を大事に受け止め、認め励ます等、援助をしていきたい。さらに、全職員で協力してティーム保育を行い、保育記録をとっていくことで多面的・多角的に内面理解をし、援助の工夫を図りながら人とかかわる力の育ちを促していきたい。

3 保育の目標

- ・進んで友だちとかかわり、友だちと一緒に遊びを進める楽しさを味わう。

4 保育の視点

- ・友だちと一緒に遊びを進める楽しさを味わわせるための援助のあり方を探る。

5 保育実践の展開

幼児の姿	・ほとんどの子が園生活に慣れ、生活や遊びに意欲がでてきて、行動範囲が広がった。 ・好きな友だち同士、気の合う友だち同士2～3人連れだって遊ぶ姿が見られる。 ・自己主張が強くなり、意見のぶつかり合いや玩具の奪い合いが原因でトラブルが起きることが多い。	
ねらい	・友だちと一緒に遊びを進める楽しさを味わう。	内容 ・自分の思いを伝え、相手の考え方も受け入れて遊ぶ。 ・友だちと試したり、工夫したりしながら遊びを進める。 ・友だちと同じ遊びに取り組みながらつながりを感じて遊ぶ。
8:30	○順次登園 ・挨拶、持ち物の始末をする。	・一人一人と挨拶を交わしながら健康状態を把握する。 ・出欠の確認をし、休みの連絡があった場合はその子の状況を伝え翌日、かかわりがもてるようにする。
9:00	○話を聞く ・手遊びをする。	・手遊びでリラックスし、話を聞く雰囲気をつくって今日の遊びに興味を持たせるようにする。
9:10	◎好きな遊びを楽しむ。 ビー玉転がし ◇ビー玉転がしに興味を持って遊べるよう、ある程度環境を作っておく。 ◇必要に応じて使えるように材料や用具を準備しておく。 (紙筒、空き箱、ビー玉、ペットボトルの蓋、ダンボール) ★教師も一緒に遊び、楽しさを共有したり、楽しい雰囲気を作ることで、周りに自分もやってみたいという気持ちを持たせるようにする。 ★トラブルが生じた時には、お互いの気持ちに触れられるように仲立ちをし、自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づかせていくようにする。 ★困難が生じた時は、一緒に考えたり試したりして工夫し、友だちと困難を乗り越え、成功感を分かち合えるようにする。 ★工夫している姿を認めたり、いいアイデアに共感したりしながら遊びの意欲を持たせたり、持続を図ったりする中で友だちと触れ合いが持てるようにする。 巧技台遊び ◇巧技台のコースをクリアしながら友達と一緒にコースを渡る楽しさを味わったりつながりを感じたりして遊べるように環境構成をする。 ★渡り方や順番等、トラブルが起こった時は遊びがスムーズに進められないことに気づかせ、どうすればいいか考えさせるようにする。 ★遊び方に変化を持たせ、遊びが持続するようにし、友達とかかわりが持てるようにする。 ★組み立て方や渡り方に危険な個所が見られたら、幼児に気づかせ、安全面に配慮しながら遊べるようにする。   楽器遊び ◇曲に合わせたリズム打ちの仕方を工夫したりしている姿を認めたり、意欲を持たせ教師も参加して周りに楽しさを知らせて一緒に遊べるようにする。 ★好きな曲を選んで楽しめるようテープやラジカセの置き場を工夫する。 ○片付け ◇片づけている姿を認めたり、終わった気持ち良さを感じとらせながら片づけの必要性に気づかせる。 バランスカー ★友だちを励ましたり、転ばないように捕まえてあげたりしてバランスカーができた喜びを共感する。 ★安全面に気を配りながらゆっくりやるよう言葉かけをする。 ままごと ◇友だちとままごと遊びが楽しめるように、ご馳走やなべ、テーブル等、環境を作る。 ★食べ物をつくることに夢中なので、教師がお客さんを連れて参加することにより、遊びの展開を図り、かかわりがもてるようにする。 ★「いらっしやいませ」「どうぞ」等の言葉を交わすことを楽しみながら、友達とのつながりを感じ、遊びを進める楽しさを味わえるようにする。	
10:00	○話し合いをする。 ・自分の思っていること、楽しかったこと等を話す。	・友だちと一緒に楽しく遊んでいたこと、考えたり試したりして工夫して遊んでいたこと等、を話し合い、明日の遊びに期待を持たせるようにする。
評価	・友だちと一緒に遊びを進める楽しさを味わっていたか。	

6 保育の視点の検証

○友だちと一緒に遊びを進める楽しさを味わわせるための援助のあり方を探る。

(1) 環境構成の面から

- ・幼児が興味を持って遊びたいような環境構成をしたことで、自然に友だちとかかわり、自分の思いを伝え合ったり相手の思いを受け入れたりして遊ぶ姿が見られた。
- ・ビー玉、段ボール、長い筒等身近な素材を提示したことで興味を示し、素材の特性を生かして考えたり試したりして工夫しながら友だちと遊びを進める姿が見られた。

(2) 教師の援助の面から

- ・全職員でディーム保育を行い、一人一人の内面理解をしたり、個々の幼児の要求に応じたりして援助にあたったことでほとんどの子が友だちと一緒に遊びを楽しんでいた。
- ・遊びに必要な物を家から持ってきた子の気持ちを受け止めてあげたり役割を与えたことで、意欲的に遊ぶ姿が見られた。
- ・自分なりに考えたり試したりして工夫している姿を認め、うまくいかない時は一緒に考える等、援助をしたことで困難を乗り越え、友だちと成功する喜びを分かち合う姿が見られた。
- ・遊びが停滞した時、新しいルールを作り出したことで、遊び方に変化を持たせ、遊びの広がりや持続が見られた。

V 研究の考察

(1) 保育記録を基にした多面的・多角的な内面理解（視点①の検証）

- ・友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わったAさんの姿から

Aさんは普段、遊びの中で物の奪い合い等、自分の思いが通らない時、きちんと思いを伝えようとせず、友だちを叩いてしまったり嫌がることを言ったりしてケンカになることが多い。

「ビー玉で面白いゲームができないかな？みんなで考えて作ってみよう」という教師の話聞いてAさんは翌日、家から大きいビー玉を持ってきて自分から担任に「ビー玉持ってきたよ」と告げた。父親に「ビー玉を幼稚園に持っていったらダメじゃないの？」と言われたが「ゲーム作るから大丈夫」とAさんは言っていたそうである。教師は皆にAさんのビー玉を見せ、Aさんの意欲を認めてあげた。早速、段ボールの坂道を友だちと一緒に組み立ててビー玉を転がして遊んだ。ビー玉の転がし方を工夫したり、受け止め方を変えたりして夢中になって遊ぶ姿が見られた。又、段ボールのつなぎ目がはずれた時、筒の重ね方の上下を変えたり、ビー玉を転がす傾斜の傾き具合を考えたり、試したりして工夫をし、成功した喜びを友だちと共感する姿も見られた。友だちに自分のビー玉を貸してあげる優しい面も見られた。教師は、Aさんに皆の役に立つという経験をさせ、又、皆にはAさんの良さを知って欲しいと思い、片づけの時にビー玉の回収係りを頼むとAさんは喜んでやってくれた。その後、Aさんは製作が上手なTさん、Hさんら仲間4人を誘って空き箱でロボットを作った。お互いに作ったロボットを見せ合ったりしながら「みんなで遊んだら楽しいな」と言いAさんは満足気であった。

R教諭：Aさんは自分のやりたい遊びが満足にできて一日中嬉しかったと思う。

M教諭：先生の話聞いて父親に「ビー玉を幼稚園に持っていったらダメじゃの？」と言われても「大丈夫」と言って家からビー玉を持ってきたということはAさんの気持ちの中にビー玉遊びに対する期待が大きかったのだろうね、よほどビー玉遊びがやりたかったと思う。

K教諭：先生がAさんの意欲を受け止め、皆の前で認めてあげたことも嬉しかったと思うよ。

R教諭：材料が揃っていて、時間もたっぷりあったから満足して遊べたと思う。

M教諭：筒のつなぎ目がはずれた時、Aさんはすぐに直していた。自分なりのイメージがあったみたい。

Y教諭：砂遊びの時もトイの重ね方の上下を変えたり傾き具合を調節したりして遊んでいたよね。その経験も生かされたのかもね。

M教諭：今まで自分の思い通りにならないと相手を叩くこともよくあったけど、自分なりのイメージで満足して遊べたからビー玉を友だちに貸してあげたり、筒が外れたのを直してあげたりして優しい気持ちになったと思う。

R教諭：「みんなで遊んだら楽しいな」とAさんが言った言葉にびっくりしたし、4人のメンバーで遊ぶというのはあまりないのでめずらしいなと思って見ていた。

M教諭：何でAさんはTさん達を誘ったんだろうね。

Y教諭：Tさんが作ったロボットを見て「上手だな」ってTさんの良さを知ってAさんはTさんら仲間4人を誘ったと思うよ。Aさんの満足そうな顔を見ると、どの子もAさんのように満足に遊べるように興味を引き出して遊びたくなるような環境構成、援助をしていくことはやはり大事だね。

【考察】

Aさんにとって自分のやりたいことに取り組むことにより、友だちと一緒に過ごす楽しさを味わったり、自分の存在感を感じたりして、友だちと様々な感情体験を味わったと思う。一緒に製作していたロボットが完成し、喜びを分かち合う姿も見られた。このような体験を通して、様々な心を動かす出来事を友だちと共有し、相手の感情にも気づいていくことができるようになると思う。

(2) 幼児の発達の方角を見通し、発達を促す援助を探る。(視点②の検証)

・自分から気持ちの取り直しができるようになったRさんの姿から

【発達の方角を見通す】

- ・Rさんは自分の思いが伝わらない時、自己主張が強く、相手のことを受け入れようとしないことが多いことから自己主張だけではなく相手の気持ちも受け入れて気持ちの調整をし、楽しく遊べるようになって欲しい。

【発達に必要な経験】

- ・言葉のやり取りから相手の立場を知る。
- ・相手の気持ちに触れ、納得して気持ちの調整をする。

【発達を促す援助】

- ・言葉のやり取りから互いの気持ちに触れさせ、気づかせるよう仲立ちをする。援助① ② ③
- ・Rさんの気持ちを受け入れ、自分が受け入れられたという喜びを味わわせ、感情を発達に生かせるように援助をする。援助④

感情体験

幼 児 の 姿	★内面理解 ◇援 助
Tさんが押し車を発進しようとした時、たまたま通りかかったRさんにおつかってしまった。R「何で何にも言わないで俺におつける訳？」どいてって言った、言わないを繰り返して2人で激しい口論となった。 R「もう絶対許さん お前とは遊ばん」怒って部屋に行った。 教「Tさんの気持ちはどう？スッキリしたの？」 T「うんスッキリした」教「Rさんはどう？スッキリした？」 R「んん まだスッキリしていない」 教「そうなんだ 何でケンカになったのか先生にも話してくれる？」 T「どいて！って言ったのにRがどかなかった」	★Rさんはぶつけられたが何も言わない Tさんの態度が面白くないのだろう。 ★言っていないのに「言った」と主張するTさんが許せないんだな。 ◇Rさんのことが気になり、2人から話を聞いた 援助① ★やはりRさんはまだ怒っているんだ ◇Rさんの気持ちを受け止め、Rさんの気持ちがTさんにも伝わるように援助をする 援助②

R「どいてって言わなかった。」また言った、言わないを繰り返した。 教「Tさんはどいてって言ったんだね」 T「うん」 教「Tさんはどいてって言ったんだって。Rさんには聞こえなかったのかな」と言うとTさんがRさんから視線をそらした。 教「Tさんは心の中でどいてって言ったのかな？」T「うん」 教「そうだったんだ 心の中で言っていたんだね」 R「心の中で言ってもちゃんとと言わないと聞こえんよ。」 教「そうだよね ちゃんとと言わないと聞こえないよね」 Rさんの表情が和らぐ R「次からちゃんと見えよ俺に聞こえるように」 Rさんが優しくなった T「うん分かった ごめんな」 Rさんに許してもらってTさんは嬉しそう R「うんいいよ 俺と一緒に剣作って遊ぶか？俺が教えるよ」 2人でにこにこ楽しそうに剣を作って遊び始めた。	★Rさんは自分の思いが伝わらない悔しさを感じているのだろう。 ★Tさんは本当は言っていないのに口論しているうちに言った気持ちになったのかもしれない。 ◇Tさんの気持ちに触れ、Tさんの気持ちがRさんに伝わるように援助をする 援助③ ★Rさんは自己主張だけでなくTさんの気持ちにも触れることができた。 ◇Rさんの気持ち受け止め悔しい思いを乗り越えて欲しいと見守る。援助④ ★Rさんの表情、言葉が優しくなった。 ★RさんはTさんが素直に謝ったことが嬉しくて、Tさんのことを許してあげる気持ちになり、自分の気持ちも取り直すことができたのだろう。
---	--

【考察】

「もう絶対許さん お前と遊ばん」と怒ってTさんのことを受け入れようとしなかったRさん、教師は互いの気持ちに気づかせるよう仲立ちをし、Rさんの気持ちを受け入れたことで、RさんはTさんの立場を知ろうという優しい気持ちになったと思う。Rさんは「心の中で言っていた」というTさんの気持ちに触れてTさんを 許してあげることができ、気持ちの調整をして、自分から「俺と一緒に遊ぶか」とTさんを誘い、楽しく遊ぶ姿が見られた。このことからRさんの発達の方角を見通し、発達を促す援助をしたことでRさんは感情体験を発達に生かしていくことができたと思う。

VI 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- ・教師が幼児の気持ちを肯定的に受け入れてあげたり、会話の仲立ちをしたりして援助をしたことで、幼児が相手の気持ちに気づいたり、自分の気持ちの取り直しをする等、人とのかかわる力の育ちが見えてきた。
- ・ティーム保育を行い、積み重ねて保育記録をとっていくことで、多面的・多角的な内面理解をし、幼児の発達の方角を見通して援助をしていくことができた。

2 今後の課題

- ・発達を促す援助のあり方を探るために、日々の保育記録を積み重ねていくことの定着を図る。
- ・幼児の発達する姿が捉えやすく継続できるような保育記録の工夫をする。
- ・ティーム保育の充実を図り、教師同士の意識の高揚、資質向上に努める。
- ・年間を見通し、一人一人の発達段階を見据えた援助のあり方を探る。

<主な参考文献>

文部省	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館	1999 年
文部省	『幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価』	フレーベル館	1992 年
文部省	『幼稚園教育指導資料第4集 一人一人に応じる指導』	フレーベル館	1995 年
大場牧夫編著	『人間関係』	ひかりのくに	1991 年